

者が見ることのできたのは、ストラヴィンスキーやプロコフなど、大戦期にヨーロッパからアメリカに亡命した作曲家の自筆譜である)などは多くの人手がなければ維持は困難であろう。なお、これらのコレクションを購入し、維持管理する経費は州からだけでなく、数多くの企業の寄付によるものであるというが、これだけのハードとソフトを州立大学が有している現実、様々な意味での社会の豊かさを示すものではないだろうか。

また、先述した桜井は、江藤淳のアメリカに対する「適者生存」という概念も引用する。²「日本の国民健康保険に相当する社会保障制度のないこの国〔＝アメリカ合衆国〕で、病気をしたらすべて終わり」であり、この場合「病人は不適者」である。そして、「自分のことは自分で黙って処理するしかない」という、いわば社会的ダーウィニズムがこの国の価値観なのであるという。但し、このことは、通りすがりの旅行者にはあまり見えてこない。

このような意味で筆者が実際に見ることができた例の一つは、モントレイからロス・アンゼルスへ向かう途中の海岸の展望台に設置されていた看板である。展望台から海辺までの険しい遊歩道の入り口には「リスクは自分自身で負うこと」と表示されていた。事故が起こった際に管理者は責任を負わないということを明記したもののだが、この看板の表示は単に自己責任の明確化ということだけでなく、事故を起こすかもしれない、準備の不十分な者は(この現場では)不適者であるということを示していることに他ならない。

桜井の引用した小田や江藤のアメリカ解釈はいずれも1960年代になされたものではあるが、これが現在でも決して的外れでないことに筆者は気付かされることになった。一介の旅行者に過ぎない我々にアメリカ合衆国はどれほどの真実の姿を見せてくれるだろうか。

2 アメリカ社会の豊かさ バリアフリーの先進国として

アメリカ合衆国の土を踏んで、まず目に付いたのは、身体障害者など、社会的弱者への対応が目に見える形で示されていたことである。

身体障害者優先を示す車椅子の表示は、近年日本でも様々な場所で見られるようになってきているが、まだ、しっかりと社会に根付いているとはいえない。事実、日本でも大型店舗の駐車場などでこうしたスペースを設ける場所も増えてきているが、利用者が無頓着であり、こうした配慮を必要としない人々が利用してしまっているケースが往々にして見受けられる。カリフォルニア州の観光地、ハースト・キャッスルのヴィジターセンターの駐車場の優先スペースに駐車していた車には、



ナンバープレートやバックミラーのタグなど何らかの形で、身障者の利用を示す掲示がなされている(写真1)。また、ミネソタ大学農学部のカンパスのやはり身障者優先スペースを示す標識には、「違反者には200ドル以上の罰金」ということが明記されていた(写真2)。

地域によっては、行政側もかなり力を入れていることが伺える。それでも、施設の中には利用者のモラルに任されているところも多いようで、ミネソタ州ミネアポリス近郊の商業施設、モール・オブ・アメリカの駐車場では優先スペースに何の表示もない車が何台も駐車している光景を見ることができた。案内してくれたホームス

